

ベネディクト 16 世

詩編について

第八卷

- ・ 第 4 週 晩の祈り
- ・ マリアの賛歌



私たちは、時課の典礼の小さな部分である昼の祈り（六時課）をご一緒に唱えました。それは、隠世修道者である皆様の一日のリズムを特徴づけるものであり、皆様を特別な方法で、自らの主と一致している花嫁である教会の役割を果たす者にするのです。沈黙と隠されること（隠世）の内にある皆様の主への奉獻は、御聖体の犠牲の内に日々頂点に達するこの祈りの唱和を通して、肥沃で実り豊かなものとされます。それは、個人的な聖成と浄化の旅にとどまらず、皆様が全教会のために果たしておられる取り次ぎの祈りの使徒職でもあります。こうして、全教会が主の御前に清く聖なるものとして現れることでしょう。

教皇ベネディクト 16 世

	土	日	月	火	水	木	金
第 1 唱和	詩編 122		詩編 136 前	詩編 137	詩編 139 前	詩編 144 前	詩編 145 前
第 2 唱和	詩編 130	詩編 112	詩編 136 後	詩編 138	詩編 139 後	詩編 144 後	詩編 145 後
第 3 唱和	ヒィリピ 2		エフェソ		コロサイ		

詩編 122

1, 今、祈りとして唱えられた賛歌は、「都に上る歌」の中で、もっとも美しく、感動的なものの一つです。この詩編 122 では、すべての人が生き生きと、エルサレムで行われる祭儀に参加します、この聖なる都エルサレムに、巡礼者は上ります。

詩編はただちに冒頭から、信者が経験した二つのことを、同時に述べています。一つは、「神の家に行こう」(1節) という招きを受けた日のことです。もう一つは、エルサレムの「門」(2節参照) に着いた喜びです。信者はついに、聖なる愛すべき地に足を踏み入れます。まさにそのとき、信者の口が開き、シオンをたたえて、喜びの歌を歌い始めます。その歌は、シオンを深く霊的な意味でとらえています。

2, 「しげく連なる町、エルサレム、すべての民の都」(3節)。エルサレムは、安全と堅固さを象徴する町であり、イスラエルの十二部族の統合の中心です。十二部族は、彼らの信仰と礼拝の中心であるこの町に集まります。彼らはエルサレムに上って、「神に感謝をささげる」(4節) のです。エルサレムは、「イスラエルの律法」(申命記 12:13-14、16:16) によって、唯一、正式で完全な聖所と定められた場所だからです。

エルサレムには、もう一つ重要な意味があります。それは、神がイスラエルとともにおられることの、しるしともなるものです。すなわち、「ダビデの家の座」(詩編 122:5 参照)。ダビデ王朝の支配は歴史の中で働く髪の毛のわざを表します。神のわざは、イスラエルをメシアへと導きます(サムエル下 7:8-16 参照)。

3, 「ダビデの家の座」は、同時に「さばきの座」とも呼ばれます(詩編 122:5 参照)。王は、最高の裁判官でもあるからです。それで、エルサレムは、政治的な都であるだけでなく、最高裁判所でもあったのです。さまざまな訴訟の最終的な審理は、エルサレムで行われました。こうして、ユダヤ人の巡礼者たちは、シオンを離れて、公正と平和を回復したそれぞれの村に帰っていったのです。

このように、詩編は、宗数的機能と社会的機能の両面から、この聖なる都の理想的な姿について述べます。こうして、聖書の宗教は、抽象的あるいは私的なものではなく、正義と連帯感にあふれたものであることが明らかになります。神との交わりは、かならず兄弟どうしの交わりを伴うのです。

4, 最後に行われる、祈願の祈りを読みしたいと思います(6-9節参照)。この祈りは、ヘブライ語の「シャローム(平和)」と言う言葉で韻を踏んでいます。「シャローム」は、伝統的に、この聖なる都の名前の元になっていると考えられています。「エルシャライム」は、「平和の都」の意味に解釈されるからです。

ご存知のように、「シャローム」は、メシアがもたらす平和を暗示します。このメシアがもたらす平和は、喜び、繁栄、幸い、豊かさを含むものです。実際、巡礼者は、「神、主の家」である神殿に別れの挨拶を告げる際、平和の上に「幸い(恵み)」と言う言葉を付け加えています。「エルサレムに平和。…エルサレムの上に恵みを願おう」(9節)。これは、フランシスコ会で用いられる挨拶の言葉、「平和と幸いがありますように」(Pace e bene!) の先取りともいえます。この挨拶は、聖なる都を愛する信者が、民のいのちを守る物理的な施設としての城壁と宮殿に対して、またすべての兄弟と友人に対して述べた、祝福の予言です。こうしてエルサレムは、和解と平和の家となります。

5, 詩編 122 の黙想を終えるにあたり、教父が行う考察に耳を傾けたいと思います。教父たちは、古代のエルサレムを、もう一つのエルサレムを示すしるしと考えました。このもう一つのエルサレムも、「堅固な都として建てられました」。大聖グレゴリオは、『エゼキエル書講話』の中で、こう述べています。「この町は、聖人たちの行いによって建てられた、大きな建物です。この建物では、一つの石が別の石を支えています。なぜなら、一つの石は、別の石の上に置かれているからです。そして、別の石を支える石は、また別の石に支えられています。したがって、聖なる教会の中では、まさにこのようにして、それぞれの人が人を支え、また人に支えられています。彼らは互いに緊密に支え合っているため、彼らを通して愛の家が建てられます。それで、パウロはこう勧めています。『互いに重荷を担い合いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです』(ガラテヤ 6:2)。この律法の力を強調しながら、パウロはこう言います。『愛は律法を全うするものです』(ローマ 13:10)。実際、もし私が、あなたをそのまま受け入れようと努めなければ、また、あなたが、私をそのまま受け入れようと努めなければ、私たちが愛の家を築くことはできません。私たちは、忍耐強い愛によって、互いに結ばれているからです」。このようなたとえを完成させるために、忘れてはならないことがあります。すなわち、「一つの土台が、家のすべての重みを支えています。その土台こそ、私たちのあがないの主です。この方だけが、わたしたちの行いのすべてを、完全に耐え忍ぶことができるからです。この方について、使徒パウロはこう述べています。イエズス・キリストというすでに据えられている土台を無視して、誰もほかの土台を据えることはできません』(I コリント 3:11)。この土台は、ほかの石を支えますが、ほかの石が、この土台を支えることはありません。つまり、あがないの主は、私たちすべての者が犯した罪の重荷を担ってください。しかし、あがないの主には、ゆるされるべき罪がないのです」(『エゼキエル書講話』 2・1・5: Opere di Gregorio Magno, III/2, Rome, 1993, pp. 27, 29)。

第4週 土曜日 晩課 第2唱和

詩編 130

1, 今、唱えられた詩編は、キリスト教の伝統の中でもっとも有名で、また愛されてきた詩編の一つです。この詩編は、ラテン語版の冒頭の言葉に従って、「デ・プロフンデイス (深い淵の底から)」と呼ばれます。「ミゼレレ (わたしを憐れんでください)」(詩編 51) とともに、この詩編は、民間信心において悔悛詩編の一つとして親しまれてきました。

この詩編は、葬儀に用いられます。しかし、それだけでなく、このテキストは何よりもまず、神の憐れみと、罪人が主にゆるされることをたたえる賛歌です。主は義なる神ですが、常に進んで、ご自分が次のような方であることを示します。「憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、いつくしみとまことに満ち、幾世代にも及ぶいつくしみを守り、罪と背きと過ちをゆるす」(出エジプト 34・6-7)。だからこそ、この詩編は、主の降誕と主の降誕の八日間の教会の祈りと、第4主日の教会の祈り、また、神のお告げの祭日

の教会の祈りで用いられるのです。

2, 詩編 130 は、悪と罪の深い淵から叫ぶ声で始まります (1-2 節参照)。祈る「わたし」は、主に呼びかけます。「神よ、深いふちからあなたに叫び」。それから詩編は、罪とゆるしのテーマを 3つの段階を追って述べます。第一の段階は、神への回心です。「わたし」は、神を直接「あなた」と呼びます。「あなたが悪に目を留められるなら、主よ、だれがあなたの前に立てよう。しかし、あなたのゆるしのために、人はあなたをおそれようとぶ」(3-4 節)。

重要なことは、主への敬い、すなわち愛を伴った主を畏れる態度は、罰から生じるのではなく、ゆるしから生まれるということです。神の怒りよりも、寛大で、恐れを取り除く神の広い心が、私たちに聖なる畏れを引き起こします。実際、神は、情け容赦なく罪をとがめる王ではなく、いつくしみ深い父です。私たちは、この父を愛さなければなりません。それは、罰を恐れるがゆえにではなく、進んで私たちがゆるそうとする、そのいつくしみのゆえにです。

3, 二番目の段階で、祈る「わたし」は、もはや主に呼びかけるのでなく、主について語ります。「神はわたしの希望、わたしの望み、わたしはその言葉に寄り頼む。夜明けを待ちわびる夜回りにもまして、わたしの心は主を待ち望む」(5-6 節)。悔い改めた詩編作者の心には、いまや、神が解放の言葉を告げ、罪を打ち消してくださることへの期待と希望と確信が生まれます。

最後の第三段階になると、詩編作者の言葉は、イスラエル全体にまで及びます。イスラエルの民は、しばしば罪を犯し、神の救いの恵みを与えていただく必要を感じているからです。「イスラエルよ、神に寄り頼め、神は豊かなあがないに満ち、いつくしみ深い。神はすべての罪からイスラエルを救われる」(7-8 節)。

詩編作者は初め、自分一人の救いを祈り求めました。いまやこの救いは、全共同体へと広がります。詩編作者の信仰は、契約の民の信仰の歩みと重ね合わされます。主は、契約の民を、エジプトでしいたげられた苦しみからあがなうだけでなく、「すべての罪から」あがなってくださいます。

「デ・プロフンディス」の祈りは、罪の闇の淵から、神が開く輝かしい未来へと到達します。この未来では、「あがないといつくしみ」が支配します。いつくしみとあがないは、神がもっている二つの偉大な特徴だからです。

4, キリスト教の伝統の中でこの詩編について行われた考察に、耳を傾けることにしましょう。私たちは聖アンブロジオの言葉を選びたいと思います。アンブロジオは、その著作の中で、何が人に神のゆるしを祈り求めさせるのかについて、しばしば思いめぐらしています。

「私たちの主は、すべての人をゆるそうと望んでおられる方です」。アンブロジオは、『ゆるしについて』の中で、こう述べた上で、次のように付け加えます。「あなたが義とされたいなら、自分の犯した過ちを告白しなさい。謙遜に罪を告白するなら、もつれた罪は解きほぐされます。……ゆるしが与えられる希望が、いかにあなたを告白へと導くかが、おわかりでしょう」(2:6:40-41: Sancti Ambrosii episcopi Mediolanensis opera, XVII, Milano-Rolla, 1982, p. 253)。

『ルカ福音書注解』の中で、このミラノの司教は、同じ招きの言葉を繰り返しながら、神がゆるしに加えて与えてくださる、驚くべきたまものについて述べています。「どれ

だけ神がいつくしみ深く、罪を進んでゆるそうとしておられるかを考えてみなさい。神は、取り去られたものを返してくださるだけでな、予期せぬたまものも与えてくださいます」。洗礼者ヨハネの父ザカリヤは、天使の言葉を信じなかったので、口が利けなくなりました。けれども、後に神はザカリヤをゆるし、賛歌によって預言を行うたまものを与えられました。アンブロジオはこう述べています。「すこし前まで口が利けなかった人が、いまや預言しています。主を否んだ、まさにその人か、主に告白することは、主が与える、もっとも偉大な恵みの一つです。ですから、過去に犯した罪を悔やんでいても、確信を抱きなさい。神が報いてくださることについて、けっして絶望してはいけません。あなたが罪を悔い改めるなら、神はかならず思い返してくださいます」(2・33:Sancti Ambrosii episcopi Mediolanensis opera, XI, Milano-Rome, 1978, p.175)。

第4週 土曜日 晩課 第3唱和

フィリピ 2:6, 9-11 4

1, さまざまな詩編や賛歌を用いて行われる、教会の祈りの晩の祈りに従って、今日は再び、驚くべき、また重要な賛歌が唱えられました。この賛歌は、フィリピの信徒への手紙の中に聖パウロが挿入したものです(フィリピ 2:6-11)。

私たちは以前に、このテキストが、下降と上昇という二つの動きを含むということを示しました。キリスト・イエズスは、まず、ご自分が本性としておられた神性の栄光の身分から、へりくだって、「十字架の死」に至るまで降りていくことを選びます。こうしてイエズスは、ご自分がまことの人でありながら、私たちのあがない主であることを示します。イエズスは、悲しみと死という私たちの現実を、真の意味で、また完全なしかたで引き受けたからです

2, 二番目の、上昇の動きは、キリストの過越の栄光を現します。この栄光は、キリストの死後、神の御稜威(みいつ)の栄光のうちに、再び現れるからです。

御父は、受肉と受難によって示された御子の従順のわざを受け入れ、いまや彼を「高く上げ」ます。ギリシア語本文に書いてあるとおりです。キリストが高く上げられたことは、キリストが神の右の座に着くことによってだけでなく、また、キリストに「すべてにまさる名」(9節)が与えられることによって表されます。

さて、聖書で用いられる「名」という言葉は、ある人物の真の本質と、特別な役割を表します。「名」はその人の内面の奥深くにあるあり方を表すのです。愛によって、死に至るまでへりくだった御子に、御父は比類のない地位を与えます。すなわち、「主」という高い「名」です。この名は、神自身の名なのです。

3, 実際、天上のものも、地上のものも、地下のものも、ひざまずき、声を合わせて、はっきりと信仰を告白します。「イエズス・キリストは主である」(11節)。ギリシア語で、イエズスは「キュリオス」であると言われていています。「キュリオス」は明らかに王を意味する称号です。この言葉は、ギリシア語訳聖書では、モーセに示された神の名、すなわち、口にすることのできない聖なる名を指しました。

したがって、一方では、イエズス・キリストが万物を支配する主であることが認められます。だから彼は、足元にひざまずくすべての被造物からたたえられます。しかしながら、他方で、キリストは神の姿、神の身分であるという信仰が宣言されます。そこから、彼が礼拝を受けるのにふさわしいことが示されるのです。

4, この賛歌では、肉と成ったみ言葉が真の人間であることよりも(ヨハネ1:14参照)、人をつまづかせる十字架のことが述べられます(Iコリント1:23参照)。この十字架は、復活の出来事と組み合わせられ、復活の出来事で頂点に達します。自らをいけにえとするほど従順だった御子に答えて、御父は御子に栄光を与えます。人間も被造物もこれに合わせて御子をたたえます。キリストが唯一の方なのは、キリストの役目が、あがなわれた世界の主であることだからです。世は、キリストの「死に至るまで」の従順のゆえに、キリストによってあがなわれました。この救いの計画は、御子によって完全に実現します。そこで、信じる者は、何よりも典礼によって、この救いの計画を告げ知らせ、その実りを味わうよう招かれます。

これが、このキリスト賛歌が私たちをそこへと導く目的なのです。教会は、この賛歌を、何世紀にもわたって黙想し、歌い、人生の導きとしてきました。「互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエズスにも見られるものです」(フィリピ2:5)。

5, この賛歌について、ナジアンズの聖グレゴリオが、知恵に満ちたしかたで書いた考察に耳を傾けたいと思います。この4世紀の偉大な教会博士は、キリストをたたえる詩の中で、こう述べています。イエズス・キリストは「その神的本性のいかなる部分も脱ぎ捨てることはありませんでした。にもかかわらず、彼は悪臭を放つ傷に身をかがめてそれを癒し、私を救ってくださいました。……彼はダビデの子孫でしたが、アダムを造られた方です。彼は肉とされましたが、肉体と関わりをもちませんでした。彼は母から生まれましたが、その母はおとめでした。彼は限りある存在でしたが、無限な方でもありました。彼は飼葉桶の中に置かれたが、占星術の学者たちを導きました。占星術の学者たちは、贈り物を携えて彼のもとに来ると、彼の前でひざをかがめました。彼は死すべき者として悪魔と戦いましたが、悪魔は彼に打ち勝てませんでした。彼は三度戦って、誘惑する者を退けました、……彼はいけにえとしてささげられましたが、大祭司でもありました。彼は自分をささげたにもかかわらず、神なる方でした。彼は神にご自分の御血をささげました。こうして彼は全世界を清めました。彼は十字架につけられて地上から上げられましたが、釘が罪を貫きました。……彼は死者のもとに下りましたが、陰府(よみ)から復活して、多くの死者を復活させました。初めに起こることは人間の悲惨を表しますが、その後起こることは不死であることの豊かさを示します。…不死の御子は地上の姿をとりました。それは、彼があなたを愛するがゆえです」(『詩集』2: Collana di Testi patristici, LVIII Roma, 1986, pp. 236-238)。

この黙想の終わりに、私たちの人生のために、二つの言葉について、特に申し上げたいと思います。

まず申し上げたいのは、聖パウロの勧めの言葉です。「互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエズスにも見られるものです」。イエズスと同じ思いを抱くように努めようではありませんか。イエズスの思いに倣って、考え、決断し、行動するように努めようではありませんか。私たちがイエズスと同じ思いを抱きたいならば、こうした道を歩もうではありませんか。よい道を歩もうではありませんか。

もう一つの言葉は、ナジアンズの聖グレゴリオのもので、「イエズスはあなたを愛しています」。この優しい言葉は、私たちが大いに慰めます。けれどもそれは、日々担うべき、大きな責任をも意味しています。

第4週 日曜日 晩課 第2唱和

詩編 112

1, 昨日 (11月1日)、天の諸聖人の祝日を祝った私たちは、今日、すべての亡くなった信者を記念します。ミサの祈りは、私たちが、世を去ったすべての愛する人々のために祈り、死の神秘に思いを馳せるように促しています。死は、すべての人が共通に受け継ぐものだからです。

信仰の光に照らされて、私たちは、死という人間のなぞに、落ち着いた心で、希望をもって目を向けます。聖書によれば、死は終わりではなく、新しい誕生です、私たちはこの道を通っていかなければなりません。この道を通して、神の言葉の命令に従って地上の生活を送った人は、満ち満ちたいのちに達することができます。

詩編 112 は、知恵の言葉として書かれたものです。この詩編は、正しい人の姿を述べています。正しい人は、主を恐れ、主がすべてのものを超えた方であることを認めます。そして、死後、主にまみえることを待ち望みながら、信頼と愛をもってそのみ旨に従います。

このように忠実な人に、「幸せ」が約束されます。「幸せな人、神をおそれ」(1節)。詩編作者はすぐに、この畏れがどのようなことであるかを詳しく述べます。神への畏れは、神の戒めに従うことによって示されます。詩編作者は、神の戒めを「深く愛し」、そこに喜びと平和を見いだす人は幸いだと告げます。

2, それゆえ、神への忠実さは、希望と、内的また外的な調和の源です。道徳的なおきてを守ることは、良心の深い平和を生み出します。実際、「報い」に関する聖書の考え方によれば、正しい人は神の祝福でおおわれます。この祝福は、正しい人が行うわざと、その子孫とに、安定と成功を保証します。「その子らは地において強くなり、心の正しい人の子孫は祝福される。富と栄えはその家にあり」(詩編 112:2-3, 9 参照)。

しかしながら、こうした楽観的な見方に対立するのが、正しい人ヨブの厳しい考察です。苦しみの神秘を経験したヨブは、自分が不正な罰を与えられ、無意味な試みに遭わせられていると感じました。ヨブは、この世で大きな苦しみを受けた正しい人々の代表者です。それゆえ、私たちはこの詩編を、人間の生活のすべての側面を含めた、啓示の全体を視野に入れて読む必要があります。

とはいえ、信頼することには、依然として意味があります。詩編作者が言おうとしたのも、そのことです。不正で道徳に反する行為によって偽りの成功を得ようとするいかなる道も選ばず、道徳的にとがなく振舞う道を選んだ人は、そのことを経験したのです。

3, 神のみ言葉に忠実に従う、このような態度の中核を占めるのが、貧しい人と困っている人をいつくしむという、根本的な選択です。「しあわせな人、情け深く人に貸し、…かれは貧しい人に惜しみなく与え」(詩編 112:5, 9)。それゆえ、神に忠実な人は、寛

大な人です。聖書に定められたおきてに従って、彼は、生活に困っている兄弟がいれば、利子をつけずに貸し与えます（申命記 15:7-11 参照）。彼は、貧しい人の生活を見殺しにするような、高利貸しの汚名を受けることはありません。

正しい人は、預言者が常に述べてきた勧めを守って、見捨てられた人々に手を差し伸べ、豊かな援助を行って彼らを支えます。9 節は「彼は貧しい人におしみなく与え」と述べています。この言葉は見返りを期待することのない徹底した寛大さを表しています。4, 詩編 112 は、おきてに忠実で正しい人、すなわら「憐れみ深く、良い人、正しい人」の姿について述べるだけでなく、最後に、ただ 1 つの節で(10 節参照)、神に逆らう人の姿を示します。この神に逆らう人は、正しい人の成功を見て、怒りとねたみに歯ざりしります。これは、悪しき良心をもった者の味わう苦しみです。その反対に、寛大な人の心は「毅然として何者も恐れぬ」（7-8 節）のです。

わたしたちは、「貧しい人におしみなく与え」る正しい人の落ち着いた顔に目をとめます。そして、この考察の終わりに、アレキサンドリアのクレメンスの言葉に耳を傾けたいと思います。クレメンスは 3 世紀の教父です。クレメンスは「不正にまみれた富で友達を作りなさい」という、理解しづらいイエズスの招きを注解しています（ルカ 16:9 参照）。不正な管理人についてのこのたとえ話は、私たちが「不正にまみれた富」で善いことをしなければならぬと述べています。そこから疑問が生まれます。お金や富はそれ自体で不正なものなのでしょうか。そうでないとすれば、主は何を言おうとしたのでしょうか。

『救われる富者は誰か』という著作の中で、クレメンスはこのたとえ話について優れた説明を行っています。イエズスはこのみ言葉によって「次のようなことを明確にしているのである。つまり財というものはすべて本性的に、もし人が窮した人々のために共用に供せず、自分自身のものであるとして自らのために獲得するならば不正なものである。しかしそのような不正からできえ、義（ただ）しき者や救いを獲得することができる。そして、父の許（もと）に永遠の幕屋を獲得した人々を休らわせることができる、と（マタイ 10:42, 18:10 参照）（『救われる富者は誰か』31:6 ; Collana di Testi Patristici, CXLVIII, Rome, 1999, pp. 5F57 [邦訳、秋山学訳、ト智大学中世思想研究所編訳・監修『中世思想原典集成 1 初期ギリシア教父』平凡社、1995 年、451-452 頁]）。

そこで、クレメンスは読者に向かってこう警告します。「まず第一に、次のことに留意したまえ。すなわち主があなたに対して、要求されたり煩わされたりするまでじっとしているように命じているわけではないということである。むしろ、あなた自身の方から、援助を必要とする人は誰か、また救い主の弟子としてふさわしい人は誰かを探せ」（同 31:7 *ibid.*, p. 57）。

それから、別の聖書の箇所を引用しながら、クレメンスはこう忠告します。「実に、使徒も次のように美しく語っている。『喜んで与える人を神は愛してくださる』（II コリント 9:7）。すなわち与えることにおいて喜び、惜しむことなく蒔（ま）く人を神は愛するのである。これは刈り取りがわずかとなるようなことのないためである、また眩（つぶや）きや分け隔て、嘆きなしに分ち合う人を神は愛する。これは清らかな善行だからである」（同 31:8 *ibid.*）。

集会の初めに述べた通り、今日、私たちは死者を記念します。この日にあたって、私たちは皆、死のなぞに直面するよう招かれています。私たちは、どうすれば善く生きる

ことができるか、どうすれば幸せになることができるかを考えるよう招かれているのです。この問いに対して、詩編は、何よりもまず、こう答えます。与える人は幸いである、自分の人生を自分だけのために使わず、それをささげる人は幸いである。憐れみ深く、いつくしみに満ち、正しい人は幸いである。神と隣人への愛に生きる人は幸いであると。こうすれば、私たちは善く生きることができ、死を恐れる必要がなくなります。なぜなら、私たちは、神がもたらす、終わることのない幸いのうちに生きることができるからです。

第4週 月曜日 晩課 第1唱和

詩編 136 前

1, この詩編は「大きなハレル」と呼ばれる詩編の一つです。「大きなハレル」とは、ユダヤ教の過越の典礼で唱えられた、荘厳でおおそかな賛美の歌です。私たちは、晩の祈りで用いられる区分に従って、この詩編 136 の前半を聞きました。

まず、「神のいつくしみは永遠」という、繰り返して述べられる言葉について考察したいと思います。この句の中心で響いているのは「いつくしみ」という言葉です。実際、「いつくしみ」は、元のヘブライ語の「ヘセド」を正しく訳してはいますが、その意味を十分伝えきれていません。実にこの言葉は、主とその民の間で結ばれた契約を表すために、聖書で用いられる、特別な言葉なのです。この言葉は、この契約という関係から生まれた態度を述べようとしています。すなわち、忠実、忠誠、愛、そして言うまでもなく、神のあわれみです。

ここで私たちは、造り主と造られたものとの間に結ばれた、深い相互のきずなについて、簡単にまとめてみたいと思います。このような関係を結んだ神を、聖書は、顔色も変えない厳しい方、あるいは、捉えどころのない、なぞめいた存在、あるいは抗（あらが）ってもしかたのない神秘的な力を帯びた運命として、述べていません。反対に、神は、ご自分が造られたものを愛する者であることを示します。神は造られたものに目をとめ、歴史の流れに沿って彼らとともに歩み、また苦しみます。それは、不忠実な民が、神の「いつくしみ(ヘセド)」、神のあわれみ、その父としての愛にしばしば背いたからです。

2, 詩編は、この神のいつくしみを表す最初のしるしを、被造物の中に見出さなければならぬと言います。その後、歴史が来ます。感嘆と驚きに満たされながら、私たちはまず、立ち止まって、造られたすべてのものを、すなわち、天、大地と水、太陽と月と星を眺めます。

民の歴史の中で示された、神の姿を見いだすよりも前に、そこには、啓示された宇宙があります。それはすべてのものに示されています。それは唯一の造り主、「神々をはるかに越える神」、「すべてを治める主」(詩編 136:2-3 参照)によって、全人類に与えられているのです。

詩編 19 が述べるように、「天は神の栄光を語り、大空はみ手のわざを告げる。日は日に言葉を語りつぎ、夜は夜に知識を告げる」(詩編 19:2-3)。それゆえ、神のメッセージ

は、造られたものに密かに刻み込まれています。それは「いつくしみ (へセド)」、すなわち、神のあわれみ深い忠実さのしるしです。神は造られたものに存在といのち、水と食物、光と時間を与えるからです。

人は、この神の啓示を観想する、澄んだ目をもたなければなりません。私たちは、知恵の書に書かれたいましめを思い出さなければならぬのです。知恵の書は、私たちを、「造られたものの偉大さと美しさから推し量り、それらを造った方を認める」ように招いています (知恵 13:5、ローマ 1:20 参照)。造られたものに示された、神の「偉大なしるし」 (詩編 136:4 参照) を観想することによって、賛美の祈りがあふれ出てきます。この祈りが、賛美の喜びの歌に、また、主への感謝に変わります。

3, それゆえ、人は、創造のわざから、神の偉大さへと、そのいつくしみ深いあわれみへと上っていきます。キリスト教の伝統の中に常にその声を響き渡らせる、教父たちが私たちに教えているのは、このことです。

大聖バジリオは、『ヘクサエメロン (創造の六日間) についての講話』第1講話の冒頭で、創世記1章に述べられた創造物語を注解しています。そこでバジリオは、しばらく神の知恵に満ちたわざを考察します。そこからバジリオは、神のいつくしみのうちに、創造が始まった核心を認めるに至ります。このカッパドキアのカイサレイアの聖なる司教が書いた長い考察の中から、いくつかの箇所を読んでみたいと思います。

『初めに神は天地を創造された』。このすばらしい考えに私は言葉を詰まらせる (『ヘクサエメロン (創造の六日間)』 1・2・1 : Sulla Genesi, Milano, 1990, pp. 9, 11 以下、邦訳、出村和彦訳、上智大学中世思想研究所編訳『中世思想原典集成2 盛期ギリシア教父』平凡社、1992年、286-288頁)。実際、ある人々は「その心の内に棲みついた無神論のゆえに欺かれて、宇宙万物は導き手を失って秩序をなくし、偶然に任せて運行していると考えに至っているのである」。これに対して、聖書は「『初めに神が創造した』と語って、この語りの冒頭においてすぐに『神』という言葉を用いることによって、われわれの思考を照らしてくれたのである。その秩序はなんと美しいことだろう」 (同 1・2・4: ibid., p. 13)。「それゆえ、もし宇宙が始まりをもち、創造されたものであるならば、この宇宙に始まりを与えたものが何者であり、その制作者が誰であるかを探究しなければならない。……モーセは『初めに神は創造した』と語って、『神』という言葉で、我々の心に刻印と守り手として刻みつけて、彼の教えの先触れとしたのである。かの至福なる本性、惜しみなき善そのもの、理性にあずかるすべての者から愛される対象、大いに求められる美、存在者の端緒 (原理)、生命の源、知性の光、近寄りがたき知恵であるかの方が、初めに天地を創造したのである」 (1・2・6-7: ibid., p. 13)。

第4週 月曜日 晩課 第2唱和

詩編 136 後

1, 私たちは再び、詩編 136 の賛美の歌を考察します。教会の祈りの晩の祈りでは、この詩編を二つに分けて、続けて唱えることになっています。これは、内容上の構成による、

特別な区分に従ったものです。実際、主のわざの記念は、空間と時間という二つの領域で行われます。

前回の考察で取り上げた前半（1-9 節参照）では、創造によって示された神のわざが述べられました。神の創造のわざは、宇宙への驚きを生み出します。詩編のこの前半では、宇宙にある被造物を通して自らを示してくださった、造り主である神への信仰が宣言されます。詩編作者のこの喜びの歌は、ユダヤ教で伝統的に「大きなハレル」、すなわち、主にささげられた最高の賛美と呼ばれます。ところで、この喜びの歌は、今日の箇所では、歴史という、別の領域へと私たちを導きます。それゆえ、詩編の前半は、神の美しさを映し出すものとしての、被造物について語ります。そして、詩編の後半は、歴史と、時の流れの中で神が私たちに行われたいつくしみ深いわざについて語るのです。私たちが知っているように、聖書の啓示は、繰り返し、救い主である神の現存が、救いの歴史を通して、特別なしかたで示されることを告げ知らせています（申命記 26:5-9、創世記 24:1-13 参照）。

2, こうして、詩編作者は、目の前で主の解放のわざが行われていくのを眺めます。この解放のわざの中心となるのは、エジプトからの脱出という、根本的な出来事です。エジプトからの脱出は、シナイの荒れ野での困難な旅と深いつながりがあります。この旅は、約束の土地で終わります。この、約束の土地が、神からたまものとして与えられることを、イスラエルは聖書の全体を通して経験し続けました。

主は、打ち倒した怪物を裂いて無力にするかのように、海を「二つに分け」ます（詩編 136:13 参照）。この有名な、紅海を渡った出来事が、使命を帯びて未来の栄光へと招かれた、解放された民を生み出します（136:14-15 節、出エジプト 15:1-21 参照）。キリスト教は、この栄光を、洗礼の恵みによって完全に悪から救われることと解釈しました（I コリント 10:1-4 参照）。それから、荒れ野の旅が始まります。この旅の中で、主は戦士としての姿を示します。主は、紅海の渡渉から始まった救いのわざを続けながら、ご自分の民の味方となって、民の敵を打ち倒し、民を守ります。それゆえ、荒れ野と海は、自由と約束の土地をたまものとして与えられるために、悪と苦しみを過ぎ越すことを表します（詩編 136:16-20 参照）。

3, 最後に、詩編は、あの約束された土地を示します。この土地について、聖書は高らかにこうほめたたえています。「川が流れ、泉が湧き、地下水があふれる土地、小麦、大麦、ぶどう、いちじく、ざくろが実る土地、オリーブの木と蜜のある土地である。不自由なくパンを食べることができ、何一つ欠けることのない土地であり、石は鉄を含み、山からは銅が採れる土地である」（申命記 8:7-9）。

現実の土地にありえないような、この誇張された賛美は、神の与えるたまものをたたえるために行われたものです。この賛美に促されて、私たちは、神とともに永遠に生きるという、最高のたまものが与えられることを期待します。神が与えるたまものによって、民は自由になることができました。このたまものは、すべての節に置かれた答唱句で続けて繰り返されているように、主の「いつくしみ（へセド）」から生まれたものです。それは、イスラエルと契約を結んで行った約束に対する主の忠実さ、主の愛から生まれたものです。主は、民を「心に留め」ることによって、この愛を表し続けます（詩編 136:23 参照）。「さげすまれた」とき、すなわち、試練と苦しみが続くときにも、イスラエルは常に、自由をもたらす、愛に満ちた神の救いの手を見いだします。飢えや貧

しさに苦しむときも、主は姿を現して、すべての人に食物を与え、ご自分が造り主であることを保証します（25 節参照）。

4, それゆえ、詩編 136 では、唯一の神の啓示が示される、二つのあり方が組み合わされています。啓示は、宇宙において（4-9 節参照）、また、歴史において示されるのです（10-25 節参照）。造り主であり、すべての存在を支配する主が、すべてのものを超える方であることは言うまでもありません。けれども、主はまた、造られたものに近づくために、空間と時間の中に入ってこられます。主は、天のはるか遠くの、私たちと離れたところにおられるかたではありません。それどころか、主が私たちの中にいてくださることは、キリストの受肉によってその頂点に達しました。

これこそ、この詩編に関するキリスト教の解釈が、はっきりと告げることにほかなりません。教父たちが示している通りです。教父たちは、御子というたまものうちに、救いの歴史の頂点、また、御父のあわれみ深いいつくしみの最高のしるしを認めました。御子は、人類の救い主であり、あがない主だからです（ヨハネ 3:16 参照）。

さて、3 世紀の殉教者である、聖チプリアノは、その著作『善行と施しについて』の初めに、御父が御子キリストによってご自分の民のために成し遂げたわざを、驚きをもって考察しています。こうしてチプリアノは、最後に、神のあわれみを心から認めます。「愛する兄弟たちよ、神の恵みは豊かで、偉大なものである。われわれの救いのために、父なる神とキリストの寛大にして豊かなあわれみが、かつて与えられ、今も与えられているからである。父はわれわれを守り、生命を与えるために、また子によってわれわれを元の状態に修復するために、子を遣わされた。子はわれわれを神の子とするために、自ら人の子となることを望まれ、この世に遣わされた。倒れていた者を起き上がらせるために自らはへりくだり、われわれの傷を癒すために自らは傷つけられた。奴隷状態にあった人間を自由な状態へ引き上げるために自らは奴隷のように仕え、死すべき人間に不死を与えるために自らは死を耐え忍ばれた。神の憐れみはこれほど豊かで、偉大なたまものなのである」（『善行と施しについて』1: Trattati. Collana di Testi Patristici, CLXXV, Roma, 2004, p. 108 [邦訳、吉田聖訳、上智大学中世思想研究所編訳・監修『中世思想原典集成 4 初期ラテン教父』平凡社、1999 年、253 頁）。

これらの言葉によって、この聖なる教会博士は、詩編をさらに展開させています。彼は、神が私たちに与えてくださった恵みを数え上げながら、詩編作者がまだ知らなかったが、すでに期待していたこと、すなわち、神が私たちに与えた真のたまものを付け加えます。すなわち、御子というたまもの、受肉のたまものです。このたまものによって、神が私たちに与えられ、私たちとともに留まってくださるからです。神は、御聖体とみ言葉のうちに、世の終わりまで、日々私たちとともに留まってくださるのです。

私たちが受けた悪についての記憶は、いつくしみについての記憶をしばしば上回る恐れがあります。詩編は、私たちが、いつくしみについての記憶、すなわち、主が私たちに与えてくださった、また与え続けておられるすべてのいつくしみについての記憶を思い起こすのを助けてくれます。こうして私たちは、詩編作者が喜びをもって述べていることを、ついに知ることができるのです。すなわち、まことに、神のいつくしみは永遠であり、とこしえに私たちと共にある、と。

エフェソ 1:3-10 4

1, 毎週、教会の祈りは、晩の祈りで、今聞いたばかりのエフェソの信徒への手紙の冒頭の荘厳な賛歌を用いています。この賛歌は、「ベラホート」すなわち「祝福」の文学類型に属します。「祝福」は、すでに旧約聖書に現れ、後にユダヤ教の伝統の中で広まりました。それゆえ、「祝福」は神に向かって常に注ぎ出される賛美です。この神は、キリスト教の信仰においては、「わたしたちの主イエズス・キリストの父」としてたたえられます。

ですから、今読まれた賛美の歌で中心となるのは、キリストの姿です。父である神のわざは、このキリストにおいて現され、完成されたからです。実際、この一つながりの長い文章で述べられた、簡潔な賛歌で用いられる、三つの主な動詞は、常に私たちを御子へと導きます。

2, 神は「キリストのうちにわたしたちを選」んでくださいました。(エフェソ 1:4)。つまり私たちは、聖なる者となるように、また、神の養子とされ、したがってキリストの兄弟となるように召し出されました。私たちの披造物としての身分を根本的に作り変える、このたまものは、「イエズス・キリストによって」(5節) 私たちに与えられました。このキリストのわざは、神の偉大な教いの計画によって、すなわら、御父のいつくしみ深い「御心(愛)」(5節)によって、行われたものです。使徒パウロは、この御心を仰ぎ見て感嘆します。

「選ぶ」という動詞(「わたしたちを選び」)に続いて用いられる、二番目の動詞は、恵みのたまものを表します。「ひとり子によってわたしたちに恵みを与え、わたしたちはその恵みをたたえる」(6節)。ここでは、「カリス(恵み)」と「エカリトーセン(与えてくださった)」という、ギリシア語で同じ語根をもった言葉が2回用いられています、それは、あらゆる人間の応答に先立って、神の方から無償で恵みが与えられることを強調するためです。それゆえ、父がそのひとり子によって私たちに与える恵みは、神の愛を示します。この愛が、私たちを包み、作り変えるのです。

3, こうして私たちは、パウロの賛歌で用いられる三番目の基本的な動詞に到達します。このパウロの賛歌で用いられる動詞は、常に神の恵みを対象としています。「神は恵みをわたしたちの上にあふれさせ」てくださいます(8節)。それゆえ、私たちは、「あふれる」恵みの前に置かれます。言葉の元の意味に従えば、こう言うこともできます。すなわち、私たちは、あり余るほどのものを、限界も制限もなく与えられるのです。

そこで私たちは、栄光に満ちた、限りなく深い神の神秘を知ります。この神秘は、恵みと愛によって召し出された者に、恵みによって示されました。この啓示は、人間の知恵とカシかもたない者には、究め尽くすことができません。「『目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかつたことを、神はご自分を愛する者たちに準備された』と書いてあるとおりです。私たちには、神が『霊』によってそのことを明らかに示してくださいました。『霊』は一切のことを、神の深みさえも究めます」(一コリント 2:9-10)。

4, 神の「御心」の「神秘」は、一つの中心をもっています。この中心は、あらゆるもの、また、すべての歴史を一つに結び合わせることを目指しています。この中心は、すべて

のものを神の望んだ完成へと導くからです。「時が満ちれば このみ旨は実現され、天と地にあるすべてのものがキリストのうちに集められる」(エフェソ 1:10)。この「救いのわざ」(ギリシア語で「オイコノミア」)、すなわち、存在するすべてのものを一つにまとめ、調和をもたらす計画の中心にいるのは、キリストです。キリストは、教会のからだの頭だからです。同時にまた、キリストは、「天にあるものも、地にあるものも」ご自身のうちに再統合する中心でもあります。すべての分裂と限界は過ぎ去り、あの「あふれる豊かさ」が完成します。これこそが、神の御心が初めから前もって定めていた計画の、真の目標です。

こうして私たちは、創造と救いの歴史を猫いた、すばらしいフレスコ画を目の当たりにすることになります。この創造と救いの歴史について、ここで聖イレネオの言葉によって、さらに考察を深めてみたいと思います。イレネオは2世紀の偉大な教会博士です。イレネオは、その教義的な著書『異端反駁』の中で、キリストによって成し遂げられた再統合のわざについて、独自の考察を展開しています。

5, イレネオは言います。キリスト教信仰が確認しているように、「父なる神はひとり、私たちの主キリスト・イエズスもひとりあって、(キリストは救いの) 営み全体を通じて来る(方) / 万物を自分のうちに再統合する方である。ところで、その万物の中には神が形造ったものである人間も(含まれて)いる。それゆえ、(キリストは)人間をも自分のうちに再統合したのである。それは、神のみ言葉が、超天上的、霊的、不可視の(領域)で第一のものであるように、可視的、物的な(領域)でも主権をもつ(ためである)」(『異端反駁』3・16・6: *Gia e non ancora*, CCCXX. Milano, 1979, p. 268 [邦訳、小林稔訳、『キリスト教教父著作集3/I 異端反駁 III』教文館、1999年、84頁])。

それゆえ、「神のみことばが…肉のように見えただけであったとすれば、そのわざは真実なものではなかったことであろう」。これに対して、神のみ言葉は「(現象として)見えた(通り、実際、見えた通りのもの)でもあった。(すなわち)人間という昔の形成(物)を自らのうちに再統合した神(であった)。(彼がそうしたのは)罪を殺し、死を滅ぼし、人を生かすためであった。そして、このゆえに『そのわざは真実』なのである」(同3・18・7: *ibid.*, pp. 277-278 [邦訳、98-99頁])。み言葉は、時が満ちると、すべてのものをご自分のもとに引き寄せるために、教会の頭となりました。今聞いた聖イレネオの言葉を心にとめながら、祈りましょう。そうです、主よ、私たちをあなたのもとに引き寄せてください。世界をあなたのもとに引き寄せて、私たちに平和を、すなわち、あなたの平和を与えてください。

第4週 火曜日 晩課 第1唱和

詩編 137

1, 待降節は、典礼暦において、沈黙のうちに目覚めて祈りながら降誕祭を準備する期間です。この待降節の第一水曜日にあたり、私たちは、詩編 137 を考察したいと思います。詩編 137 は、ラテン語訳で「バビロンの流れのほとりに座り」(*Super flumina Babylonis*) という言葉で始まることでよく知られています。このテキストは、紀元前

586年に起こったエルサレムの破壊と、それに続くバビロン捕囚の期間に、ユダヤ人が体験した悲しい出来事を思い起こさせます。私たちは、民が歌う悲しみの歌を耳にします。この悲しみの歌は、失われたものへのつらい追憶に彩られています。

詩編は、主を信じる者をバビロンの捕囚から解放してくれるように心から主に祈り求めます。この祈りはまた、救いを希望し、期待する心をも表しています。私たちも、この希望と期待をもって、待降節の歩みを始めているのです

詩編の前半（1-4節参照）は背景となっている捕囚の地について述べています。ここでは、ユダヤ人を連れ去った本拠地であるバビロンの平原を、河と運河が流れています。それは、過ぎ去ったばかりの前世紀に、ユダヤ人が連行され、人類の歴史に消し去ることのできない汚点を残した、おぞましい殺害が行われた、強制収容所の始まりを象徴するかのようです。

詩編の後半（5-6節参照）は、シオン（エルサレム）への愛を込めた思い出に満たされています。シオンという町は失われましたが、捕囚の民の心の中で生き続けています。

2, 詩編作者は、右手、舌、上顎（あご）、歌、そして涙について語っています。右手は豎琴（たてごと）を弾く人にとって、なくてはならないものです。けれども、その右手は、悲しみのためになえたままです。そればかりか、豎琴は柳の木々に掛けられています。

歌い手が歌うには、舌が必要です。けれども、舌は上顎にはり付いています（6節参照）。ユダヤ人を捕囚にしたバビロンの民が「慰みに『シオンの歌を歌え』と」（3節）求めます（3節）。シオンの歌は、主への賛歌であり（3-4節）、民謡でも、見せ物のための歌でもありません。ユダヤの民が天に向かうことができるのは、ただ典礼の中だけであり、また、彼らが解放されたときだけです。

3, 神のみが、歴史を支配する主です。だから神は、その正義に基づいて、しいたげられた者が、時に恨みがましい声を上げて、彼らの叫びを聞いて、受け入れることができます。

私たちは、聖アウグスチヌスに、この詩編についての考察を続けてもらうことにしたいと思います。この教父は、『詩編注解』の中で、現代にも大いにあてはまるような、驚くべき内容を述べています。アウグスチヌスは、バビロンの住民の中にも、平和と共同体の善益のために努力する人々がいると言います。しかも、彼らは、聖書の信仰をもつこともなければ、私たちが待ち望む永遠の国への希望についても知りませんでした。彼らは、未知のもの、より偉大なもの、この世を超えるもの、ほんとうの意味でのあがないを望む、心の火花をもっていたのです。

またアウグスチヌスは、迫害する者、信仰をもたない者の中にも、彼らが生活する状況で、彼らに可能な限りで、このような望みの火花、ある種の信仰、希望をもっている人々がいると言っています。このような、未知の存在への信仰をもっていることにおいて、彼らは実際に、真のエルサレムへと、すなわちキリストへと歩み始めています。このような希望の始まりは、バビロン人にもあるということができると、アウグスチヌスは言います。すなわちそれは、キリストも神も知らないが、にもかかわらず、未知のもの、永遠のものを求める人々の中に見られるのです。だから、アウグスチヌスは、今この時の物質的なものだけを見るのではなく、神への道を忍耐強く歩むようにと、私たちに勧めます。このような大きな希望をもつことによって、私たちは、正しい仕方でのこの

世を変えることができるからです。

聖アウグスチヌスは、それをこう述べています。「もし私たちがエルサレムの市民なら、……また、私たちがこの世に生きなければならないなら、すなわち、混乱した今の世の中で、私たちが市民としてでなく捕囚として生きている、現代のバビロンの中で生きなければならないなら、私たちは、詩編が述べていることを歌うだけでなく、それを生きなければなりません。そのためには、永遠の国を心から敬虔に待ち望む、深い心のあこがれが必要です」。

アウグスチヌスは、「バビロンと呼ばれる地上の国」について述べながら、こう付け加えます。「この国には、平和を実現することへの愛に動かされて、平和、すなわち地上の平和を実現するために働く人々がいます。彼らは心の中で、希望を、すなわち、平和のために働く喜びを育んでいます、彼らは、地上の社会の役に立とうと力の限り努力しています。けれども、もし彼らが清らかな良心をもってその使命に励むならば、神は、彼らをバビロンとともに滅ぼすことはしないでしょ。なぜなら、神は、彼らをエルサレムの住民としてあらかじめ定めていたからです。ただし、そのために彼らは、バビロンに住んでいても、傲慢にならず、はかない栄華を求めず、高ぶって人をさげすんだりしてはなりません。……神は彼らの行う奉仕のわざをご覧になり、彼らにもう一つの国を示します。その国こそ、彼らがほんとうに持ち望み、そのために努力を尽くすべきものだからです」(『詩編注解』136:1-2:Nuova Biblioteca Agostiniana, XXVIII, Roma, 1977, pp. 397, 399)。

主が私たちすべての内に、このような望みと、神に開かれた心と呼び覚ましてくださるよう祈りましょう。また、神を知らない人の上にも、神の愛が注がれますように。こうして、私たち皆がともに永遠の国をめざして歩み、この永遠の国の光が、現代と現代世界をも照らしますように。

第4週 火曜日 晩課 第2唱和

詩編 138

1, 今朗読された、詩編 138 は、感謝の賛歌です。おそらくダビデ以降の時代に書かれたものだと思いますが、ユダヤ教の伝統ではダビデの詩とされています。この詩編は、詩編作者個人の歌で始まります。詩編作者は、神殿に集まった会衆の中で声を上げます。あるいは、詩編作者は、少なくとも、シオンの聖所との関連を述べているのだと思います。シオンの聖所は、主が現存する場であり、主が信じる民と出会う場だからです、

実際、詩編作者は、エルサレムの聖なる「神殿に向かってひれ伏し」ます(2節参照)。この神殿において、詩編作者は神の御前で歌います。神は、天使の群れとともに天におられる方ですが、地上の神殿の場で耳を傾けてくださる方でもあるからです(1節参照)。

詩編作者は、すべての確信と希望の基(もと)である、主の「名」と、主のまことといつくしみの力に信頼しています。主の「名」は、主が現実に生きて、わざを行われることを表し、主のまことといつくしみは、主がその民と結んだ契約のしるしだからです。(2節参照)。

2, それから、少しの間、過去の苦しみの日々が顧みられます。そのとき、神の声は、信じる者の悩みの叫びに答えます。神は、うちひしがれた魂を力づけます (3 節参照)。ヘブライ語の原文は、主が、文字通りの意味で、苦難のうちにある正しい人の「魂の力を奮い立たせる」と述べています。それはあたかも、一陣の突風が、ためらいや恐れを吹き飛ばし、新たに生きる力を与え、勇気と信頼を強めてくれるかのようです。

このおそらく個人的な前置きの後に、詩編作者は世界を見渡し、自分のあかしが全地に及ぶかのように考えます。「国々の王は」、すなわち、世界中は、声を合わせて、ユダヤ人の詩編作者とともに、主の偉大さと、すべてに及ぶ力をほめたたえます (4-6 節参照)。

3, すべての民がともにささげる、この賛美の内容の内に、私たちはすでに、将来の異教徒の教会、すなわち将来のカトリック教会を認めることができます。この賛美は、まず、神の「わざ」と「神の栄光」について語ります (5 節参照)。主の栄光と、主のわざとは、神の救いの計画と、神の啓示にほかなりません。こうして人は、神がたしかに「すべてを越える神」でありながら、いつくしみをもって「へりくだる者に心を留め」てくださること、また、高ぶる者から目をそむける(「近づかれない」)ことを知ります。目をそむけるとは、彼らを拒み、裁くという意味です (6 節参照)。

それは、イザヤがこう告げた通りです。「高く、あがめられて、永遠にいまし、その名を聖と唱えられるかたがこういわれる。わたしは、高く、聖なところに住み、打ち砕かれて、へりくだる霊の人とともにあり、へりくだる霊の人にいのちを得させ、打ち砕かれた心の人にいのちを得させる」(イザヤ 57:15)。ですから、神は、弱い人、打ちひしがれた人、最底辺にいる人とともにいて、彼らを守ることを選ばれます。このことがすべての王に告げられます。それは、彼らが国を治めるうえで、どのような選択を行うべきかを悟るためです。もちろん、このことは、王やすべての為政者だけでなく、私たち皆にも告げられています。私たちもまた、どのような選択をしなければならないかを知らなければならないからです。すなわち、私たちも、へりくだる人、最底辺にいる人、貧しい人、弱い人の側に立たなければなりません。

4, この全世界の国々の指導者に向けた呼びかけは、当時の諸国の指導者にだけでなく、すべての時代の指導者に語られたものです。この呼びかけの後、詩編作者は再び個人的な賛美をささげます (詩編 138:7-8 参照)。自分のこれからの人生に目を向けながら、詩編作者は、今後の人生において自分を待ち受ける苦難のためにも、神の助けを願い求めます。

そこでは、一言で「敵の怒り」(7 節) と述べられています。「敵の怒り」は、正しい人が歴史の旅路で出会う、すべての敵意を表します。けれども、正しい人は、主がけっして自分を見捨てることなく、手を差し伸べて自分を支え、導いてくださることを知っています。それゆえ、詩編は終わりに、神のとこしえのいつくしみへの信頼を、もう一度、熱烈なしかたで告白します。「御手のわざ(造られたすべてのもの)を見捨てないでください」。御手のわざとは、神が造られたもののことです (8 節)。そして、このような信頼をもって、すなわち、神への揺るぐことのない信頼をもって、私たちも生きていかなければなりません。

私たちは固く信頼すべきです。私たちを待ち受ける苦難がどれほど大きく、また激しいものであっても、神が私たちを見捨てることはありません。主の御手が私たちを手放

すことはありません。私たちが造った主の御手は、今は人生の旅路で私たちを導いてくださるからです。聖パウロがこう告白している通りです。「あなたがたの中で善いわざを始められたかたが、……そのわざを成し遂げてくださる」(フィリピ1:6)。

5, こうして私たちは、詩編とともに、賛美と感謝と信頼の祈りをささげることができます。この詩編の賛美に続けて、キリスト教の詩編作者である、偉大なシリアのエフレム(4世紀)のあかしに耳を傾けたいと思います。エフレムは、詩的で霊的な香りに満ちた著作を著しました。

エフレムはその賛歌でこう歌っています。「主よ、私たちがどれ程大きな驚きをあなたに感じて、あなたの栄光は私たちの舌が語りうることをはるかに超えています」

(「処女性についての賛歌」7: L' arpa dello Spirito, Roma, 1999, p. 66)。別の賛歌で、エフレムはこう述べています。「すべてのことを可能にする主が賛美されますように。あなたは全能だからです」(「降誕についての賛歌」(11: ibid., p, 48)。これが、私たちが神に信頼できるもう一つの理由です。神はいつくしみを示す力をもっておられ、また、いつくしみを示すためにその力を用いられます。最後に、この引用をもって終わります。「主の真理を悟るすべての者よ、主をたたえよ」(「信仰についての賛歌」14: ibid., p. 27)。

第4週 水曜日 晩課 第1唱和

詩編 139 前

1, 私たちは晩の祈りの詩編と賛歌の考察を行っています。晩の祈りで二つに分けて唱えられる詩編139は、澄んだ美しさを持ち、深い感動を与えてくれる、知恵に満ちた賛歌です。今日私たちが取り上げるのは、その前半です(1-12節参照)。この前半部は、二つの段落から成り、それぞれ、神がすべてを知っておられることと(1-6節参照)、神があらゆる空間と時間におられること(7-12節参照)をたたえます。

この詩編で力強いたとえと表現が用いられるのは、造り主を賛美するためです。5世紀のキリスト教作家のキュロスのテオドレトスは、こう述べています。「創造されたわざがかくも偉大であるなら、それを造られたかたはどれほど偉大でなければならないだろうか」(『撰理についての第四講話』: (Collana di Testi Patristici, LXXV, Roma, 1988, p. 115)。詩編作者の考察は、なによりも、すべてを超える神の神秘を究めることをめざしています。しかしながら、この神は、同時に私たちの近くにおられる方なのです。

2, 詩編が述べるメッセージの中心ははっきりしています。すなわち、神はすべてを知っておられること、また、神はその被造物とともにおられ、神から逃れることはできないということです。神がともにおられるのは、圧力をかけたり、監視したりするためではありません。もちろん、悪を目にしたときは、神は厳しいまなざしを向けます。神は、悪に対して黙っていないからです。

にもかかわらず、根本的なのは、神は、ともにいることによって、救いをもたらすということです。神の現存は、ありとあらゆるもの、また、歴史全体を包むことができる

からです。このような霊的な背景にもとづいて、聖パウロは、アテネのアレオパゴス（町の評議所）で、ギリシアの詩人の言葉を引用しました。「われらは神の中に生き、動き、存在する」（使徒言行録 17:28）。

3, 最初の段落（詩編 139:1-6 参照）は、神がすべてを知っておられることをたたえます。実際、「心にかける」、「知る」、「見通す」、「見守る」といった、知ることを意味する動詞が繰り返して用いられます。ご存じの通り、聖書において、知るということは、たんに知的な意味で学習したり理解することだけではありません。知るとは、ある意味で、知る者と知られる者が交わることです。だから、主は、私たちの思いと行いにおいて、私たちのすぐ近くにおられるのです。

詩編の二番目の段落は、神があらゆるところにおられることについて述べます（7-12 節参照）。ここでは、神の現存から逃れようとしても無駄であることが、生き生きとしたしかたで示されます。人は神から逃れて、あらゆる場所に行こうとします。まず、垂直方向に「天と死の国」（8 節参照）です。次いで、水平方向に、東の果てから、「海を渡り」—「海」は地中海なので、「海を渡る」とは西を表します—西へ向かいます（9 節参照）。このような空間のどこにいても、また、そのどこに隠れていようとも、神はたしかにそこにおられます。

詩編作者はまた、私たちを包むもう一つの現実である、時間について述べます。時間は、夜と昼、やみと輝きという言葉で象徴的にあらわされます（11-12 節参照）。進むことも、ものを見ることもできないような暗闇の中でさえも、存在と時間の主である方は、そのまなざしをもって見通し、また、その姿を現します。主はいつもその御手をもって私たちを捉え、私たちの地上での歩みを導こうと望みます（10 節参照）。ですから、主は、恐れを抱かせる裁判官としてではなく、支え、解放してくださる方として、そばにいてくださるのです。

こうして私たちは、この詩編が最終的に述べようとしている、いちばん大事な内容を理解することができます。この詩編が述べようとしているのは、この確信です。すなわち、神はいつも私たちとともにいてくださるということです。私たちの人生がどんな暗闇にあっても、神が私たちを見捨てることはありません。いかなる困難に直面したときも、神は私たちとともにおられます。そして、最終的な夜、つまり、一緒にいてくれる人が一人もいない、徹底的な孤独を私たちが味わう、死の夜にも、主が私たちを見捨てることはありません。この死の夜の徹底的な孤独の最中にも、主は私たちとともにいてくださいます。だから私たちキリスト信者は、確信をもってこう言うことができるのです。すなわち、私たちは独りきりではありません。神のいつくしみが、いつも私たちと共にあるからです。

4, 初めに私たちは、キリスト教著作家のキュロスのテオドレトスの言葉を引用しました。終わりに、私たちはもう一度、テオドレトスの『神の摂理についての第四講話』に耳を傾けたいと思います。神の摂理こそ、この詩編が最終的に述べているテーマだからです。テオドレトスは6 節について考察します。詩編作者がこう高らかに言っているところです。「わたしを包むあなたの英知は神秘に満ち、あまりに深く、及びもつかない」。この言葉を注解するとき、テオドレトスは、自分の良心と、自分自身の経験を内面から考察します、テオドレトスは述べています。「外面的な喧騒から遠ざかることによって、自分自身を顧み、自分の内面を見つめながら、私は自分の本性についての観想に専念す

ることを望んだ。……自分の本性について考察し、死すべき本性と不滅の本性の調和について考えたとき、私はその驚くべきさまに圧倒された。そして、私はこの神秘を観想しつくすことができなかつたので、自分の限界を認めた。そればかりか、私は造り主ご自身がおもておられる知識が勝利を収めたことをたたえ、造り主に向かって賛美の歌を歌うために、高らかにこう叫ぶ。『わたしを包むあなたの英知は神秘に満ち、あまりに深く、及びもつかない』(Collana di Testi Patristici, LXXV, Roma, 1988, pp. 116, 117)。

第4週 水曜日 晩課 第2唱和

詩編 139 後

1, 今日、降誕の8日間の中で、幼子殉教者の祝日です。この水曜日の一般謁見で、私たちは、詩編139についての考察を再開したいと思います。詩編139は、晩の祈りの中で二つに分けて唱えられています。前半(1-12節)では、すべてのところにおられる、全能の神、存在と歴史の主である方が観想されました。その後、このきわめて美しく、深い感情の込められた、知恵に満ちた賛歌は、この後半で、全宇宙の中で最高の、また最も驚くべき存在である、人間に焦点を当てます。詩編は、神が人間を造られたわざは「不思議」と述べています(14節)。

実際、このテーマは、この数日間、私たちが過ごしている、降誕祭の雰囲気にとってもふさわしいものです。降誕節の間、私たちは、人となられた神の子の偉大な神秘を記念しているからです。実に、神の子は、私たちの救いのために「幼子」となられました。

全宇宙に及ぶ、造り主のまなざしと存在を考察した後、今日私たちが取り上げる詩編の後半では、神のいつくしみ深いまなざしが人間に向けられます。詩編は、この人間の完全なかたちでの始まりについて考察します。

人間は、母の胎内でまだ「形のない」状態にあります。ここで使われているヘブライ語の言葉は、ある聖書学者たちによって「胎児」の意味に解釈されてきました。この言葉は、胎児を、小さな、卵の形に丸まった存在として表します。けれども神は、すでにこの存在に対して、優しく愛に満ちたまなざしを向けます(16節)。

2, 母の胎内で行われる神のわざについて述べるために、詩編作者は、聖書の古典的なイメージを用いて、いのちを生み出す母の胎を「深い地の底」にたとえます(聖務では「ひそかに」)。「深い地の底」は、偉大な母なる大地の変わることはない活力を表します(15節)。

まず用いられるのは、自分の芸術作品、すなわち傑作を「形づくり」、制作する、陶工や彫刻家のたとえです。創世記の中で、人間の創造について、こう述べられている通りです。「主なる神は、土(アダマ)の塵(ちり)で人(アダム)を形づくられた」(創世記2:7)。

それから、「織物」のたとえが用いられます。「織物」のたとえは、細やかな皮膚と筋肉と神経が、骨格に「織り込まれる」(聖務では「数えられていた」)ことを表します。ヨブも、この「織物」のたとえをはじめとしたさまざまなイメージを用いて、苦しみに打ちひしがれ、さいなまれながら、人間という神の傑作を、全力でほめたたたえました。

「御手をもってわたしを形づくってくださったのに（……）。心を留めてください、土くれとしてわたしを造（……）られたのだということ。あなたはわたしを乳のように注ぎ出し、チーズのように固め、骨と筋を編み合わせ、それに皮と肉を着せてくださった」（ヨブ 10:8-11）。

3, 神が、まだ「形のない」状態にある胎児がどのようになるかを見ておられるという、この詩編の考えは、きわめて力強いものです。この被造物である人間が、地上の生活の中で過ごし、わざを行う日々は、すでに主のいのちの書の中に記されています。

こうして、すべてを超えた神の知識の偉大さが、あらためて示されます。神の知識は、人間の過去と現在だけでなく、まだ隠されている未来の人生にまで及ぶからです。しかしここには、神の手で形づくられ、その愛に抱かれている、この小さな出生前の人間という被造物の偉大さも示されています。聖書は、その存在の最初の瞬間から、人間をたたえます。

ここで、大聖グレゴリオが『エゼキエル書講話』の中で、私たちが先に取り上げた、次の詩編の言葉を用いて行った考察に耳を傾けたいと思います。「母の胎に生き始めた時から（「胎児であったわたしを」）、…あなたの目は私の行いに注がれ、わたしのすべてはあなたの書にしるされている」（16節）。この言葉から、教皇にして教父であるグレゴリオは、キリスト教共同体の中で、霊的な道りを歩く力が弱いすべての人々についての、独創的で優れた考察を述べました。

グレゴリオは、信仰とキリスト教生活において力の弱い人々も、教会という建物の一部であると言います。「にもかかわらず、彼らは善意の徳によって教会に加えられる。たしかに彼らは不完全で小さな者である。しかし、彼らは、彼らに理解できる限りのしかたで、神と隣人を愛し、自分たちにできるすべての善いわざを行うことをないがしろにしない。完全なわざと熱心な観想に心を開くことができるほどの霊的たまものを与えられていないにしても、彼らは自分たちにわかる範囲で、進んで神と隣人を愛する。

それゆえ、このような者たちも、たとえ重要な役割を果たすことはなくても、教会の建設に貢献することができる。なぜなら、教えや、預言や、奇跡を行うたまものや、世を完全に忌み嫌うことにおいて優れていなくても、彼らは畏れと愛という基盤の上に立ち、それを自分たちのよりどころとしているからである」（『エゼキエル書講話』2・3・12-13:Opere di Gregorio Magno, III/2, Roma, 1993, pp. 79, 81）。

聖グレゴリオのメッセージは、霊的生活と教会生活の道を歩みながら疲れてしまうことの多い私たちすべてに、慰めとなるものです。主は私たちを知っておられ、私たちすべてを愛をもって守ってください。

第4週 水曜日 晩課 第3唱和

コロサイ

1, 今日、新年最初の一般謁見にあたり、コロサイの信徒への手紙に収められている有名なキリスト賛歌について考えてみたいと思います。この賛歌は、このパウロの内容豊かな手紙のいわば荘厳な門だと言うことができます。それはまた、私たちがこの一年を

始めるための導きともなるものです。

私たちが考察しようとしている賛歌は、感謝を表すさまざまな表現で縁取られています (3, 12-14 節参照)。こうした感謝の表現の助けによって、私たちは、この 2006 年の最初の数日間と、新しい年の長い道のりをふさわしく過ごすために必要な、霊的な心を整えられます。

使徒パウロは、私たちとともに、「主イエズス・キリストの父である神」(3 節参照) に賛美をささげます。この神がもたらす救いは、消極的なかたちと積極的なかたちの両方で述べられます。すなわち、御父はまず「私たちをやみの力から救い出し」(13 節参照)、「あがないと罪のゆるし」(14 節) を得させてくださいました。次いで、この救いは、「光の国を継ぐ神の民」(12 節) としてくださることであり、また「愛するひとり子の国に移して」(13 節) くださることだと述べられます。

2, 最後に述べた点をめぐって、このすばらしい、内容豊かな賛歌は展開します。賛歌の中心にあるのはキリストです。このキリストが、創造とあがないの歴史において、第一の者として働いていることを、賛歌はたたえるのです (15-20 節参照)。それゆえ、賛歌は二つの部分に分かれます。第一の部分では、キリストがすべての被造物の中で最初に生まれた方であることが示されます。キリストは「すべてのものが造られる前に生まれた方です」(15 節参照)。実際、キリストは「目に見えない神の姿 (エイコン)」です。この言葉は、東方教会の文化において「イコン」という言葉が持つのと同じ重みをもった言葉です。この言葉が強調しているのは、御子が神と似ていることだけではありません。それは、姿と、姿が映し出しているものとの密接な関係をも強調しています。

キリストは、私たちに「目に見えない神」を、目に見えるかたちで、あらためて示します。私たちはキリストの内に、その神と共通の本性を通して、神の顔を仰ぎ見ます。この共通の本性が、キリストと神を結びつけているからです。キリストはその最高の尊厳のゆえに、「すべてのもの」よりも先におられます。それは、キリストが永遠であるためだけではありません。同時にまた、何よりも、キリストが、創造と摂理のわざを行われるからです。「天と地にあるもの、見えないものと見えるもの、すべては子によって造られた。…すべてのものは神の子のためにある」(16-17 節参照)。実にすべてのものは「子のために」(16 節) 造られたものでもあります。

そこで聖パウロは、私たちにとても重要なことを指摘します。それは、歴史には目的、すなわち目指す方向があるということです。歴史は、人類がキリストの内に一致することを目指しています。それゆえ歴史は、人間の完成、人類愛の完成を目指して歩んでいるのです。

言いかえると、聖パウロは私たちにこう語りかけています。たしかに歴史は進歩します。歴史は進化すると言ってもよいかもしれませんが。私たちがキリストに近づけてくれるもの、それゆえ、私たちが人類の一致へと、真の意味での人類愛へと近づけてくれるものはすべて、進歩ということが出来ます。そこで、この指摘の裏には、歴史を進歩させるために働きなさいという、私たちへの命令も含まれています。歴史が進歩することは、私たち皆が望んでいることだからです。歴史を進歩させるために、私たちは人をキリストへと導かなければなりません。歴史を進歩させるために、私たちは自身がキリストに似たものになっていかなければなりません。このようにして、私たちは真の意味での進歩の道を歩むことができるのです。

3, 賛歌の第二の部分（コロサイ 1:18-20 参照）の中心をなしているのは、救いの歴史における救い主キリストの姿です。キリストのわざは、まず、キリストが「すべてにおいて(そのからだである教会の)かしらとなる」(18 節) ことによって示されます。教会は完全な解放とあがないを実現するための、最高の意味での救いの場です。教会は、からだの頭と肢体、すなわちキリストとキリスト信者を結びつける、生きた交わりです。パウロのまなざしは、歴史が目指す最終目標にまで

向けられます。キリストは「死者のうちから最初に生まれた方(18 節) です。だからキリストは、私たちが死と悪の限界から引き離して、永遠のいのちへの扉を開く方なのです。

実にこれこそ、キリストご自身のうちにいのちと恵みとして「あふれさせ (ブレーローマ)」てくださったものです。私たちはこの満ちあふれるものを受け、伝えられました(19 節参照)。この生ける現存の恵みを通じて、キリストの神性にあずかることによって、私たちは内的に生まれ変わり、和ぼくさせられ、平和が再び打ち立てられました。こうして、あがなわれたすべてのものは一致します。そのとき、いまや神は「すべてにおいてすべてとなられる」(I コリント 15:28) のです。キリスト信者として生きるとは、このように、私たちが、キリストに似たものとして、内的に造り変えられることです。そこから、和解と平和が実現します。

4, このすばらしいあがないの神秘を、コンスタンティノポリスの聖プロクロス (446 年没) の言葉を使って仰ぎ見たいと思います。『神の母マリアについての第一講話』の中で、プロクロスは、あがないの神秘を、受肉の結果として、あらためて示しています。

このコンスタンティノポリスの大司教は言います。実際、神が人となったのは、私たちが救って、闇の力から引き離し、愛する御子の支配下に連れ戻すためでした。まさにコロサイの信徒への手紙の賛歌が述べている通りです。プロクロスはこう述べます。「私たちがあがなった方は、たんなる人間ではありません。実に、全人類は罪の奴隷とされたからです。しかし、この方は、人間の本性を欠いた、たんなる神ではありませんでした。この方は、実際にからだをもっておられたからです。もし、私の肉をまとなければ、この方が私を救うこともなかったでしょう。この方は、おとめの胎で形づくられて、罪に定められた衣をまといました。この方は、ご自分の霊を与え、肉をとられるという、驚くべきあがないを行われたのです」(『神の母マリアについての第一講話』 8: Testi mariani del primo millenio1, Rome, 1988, p. 561)。

こうして私たちは、神のあがないのわざを目の当たりにします。このあがないのわざは、神がまさに人間でもあったことによってもたらされました。この神は、神の子であり、救い主であると同時に、私たちの兄弟でもあります。このような私たちとの親しさを通じて、神は私たちに神のたまものを注がれました。まことに、神は私たちとともにおられる方です。アーメン。

第4週 木曜日 晩課 第1唱和

詩編 144 前

1, 晩の祈りで用いられる詩編を旅する私たちが、今日読むのは、詩編 144 という、王

が歌う賛歌です。今日、読まれたのはその前半です。教会の祈りはこの詩編を二つに分けて唱えています。

詩編の前半(1-8節参照)には、この詩編が書かれた際に用いられた、はっきりとした文学的特徴が示されています。すなわち、詩編作者は、他の詩編の言葉を引用しながら、新しい賛歌と祈りを述べています。

この詩編は後の時代に書かれたものなので、ここでたたえられている王は、もはやダビデの支配に見られたような特徴をもっていません。ユダ王国の支配は、紀元前6世紀のバビロン捕囚によって終わったからです。その代わり、王は、メシアに備わる、輝かしい栄光を帯びた姿で描かれます。メシアの勝利は、軍事的勝利でも、政治的な勝利でもなく、悪に対する解放の到来を意味します。ヘブライ語で「油注がれた者」を表す「メシア」は、優れた意味での「メシア」、すなわち救い主としての「メシア」に代わりまします。この救い主としての「メシア」は、キリスト教の文書で、イエズス・キリストという顔をもつ方として述べられます。イエズス・キリストは、「アブラハムの子、ダビデの子」(マタイ1:1)だからです。

2, 詩編は祝福で始まります。この祝福は、主への賛美の叫びです。主は、救い主を表す称号による、小さな連願によってたたえられます。すなわち、主は確かな揺るぎない岩、いつくしみ深い恵み、守りの砦(とりで)、救い、悪の攻撃を退ける盾(たて)です(詩編144・1-2参照)、戦いの神というイメージも見られます。神は、信じる者に戦うすべを教えます。こうして信じる者は、自分たちを囲む敵、すなわち世の闇の力に立ち向かうことができるようになります。

詩編作者は、王の威厳を備えているにもかかわらず、全能の主を前にして、自分が弱く無力であることを感じます。そこで詩編作者は、自分がとるに足らないものであることを告白します。この告白は、すでに述べたように、詩編8と詩編39の言葉を用いて述べられます。彼は「通り過ぎる風」、「うすれゆく影」のように、変わりやすく、過ぎ行く時の流れに流されます。それは、被造物に見られる限界に基づくものです(詩編144:5参照)。

3, そこから問いが生まれます。なにゆえ神は、このみじめで弱い被造物に心をとめるのだろうか。この問い(3節参照)に対して、神は大いなる顕現、すなわち、いわゆる「神の現れ」をもって答えます。この「神の現れ」には、宇宙のさまざまな要素と、歴史的出来事が伴います。これらのものは、すべてのものを越えた、存在と宇宙と歴史の最高の王をたたえます。

そこで、火山を爆発させて煙を吐く山や(5節参照)、悪を行う者に放たれる矢のように飛び交う稲妻や(6節参照)、「さかまく海」が語られるのです。「さかまく海」は、混沌(カオス)の象徴です。神の御手の力は、この「さかまく海」から王を救います(7節参照)。これらのものの背後にあるのは、「いつわりに満ち」、「その右手でいつわりの誓いを立てる」異邦人の敵です(7-8節参照)。これらの言葉は、ヘブライ語的な言い方を用いて、偶像崇拜と、道徳違反、また、神と神を信じる者に真の意味で逆らう悪を、具体的に表現したものです。

4, 私たちは、今、詩編作者が自分のとるに足らないことを告白したところで、考察を中断して、オリゲネスの言葉に耳を傾けたいと思います。今読んだ箇所についてのオリゲネスの注解は、聖ヒエロニモによるラテン語訳で伝えられています。「詩編作者は、

肉体と人間という身分の弱さを述べています」。人間の身分を考えるなら、人間は無に等しいものです。「なんという空しさ、すべては空しい」(コヘレト 1:2) とコヘレトの言葉は述べています。再び、驚きと感謝をもって、問いが生れます。『神よ、人とは何者か、なぜ人に心を留められるのか』。……自分の造り主を知ることができたことは、人間にとって幸いです。私たちは、造り主を知ることによって、獣や他の生き物と区別されるからです。私たちは、自分たちに造り主がいることを知っていますが、獣や他の生き物はそれを知りません」。

このオリゲネスの言葉を少し考えてみるのは、意味のあることです。オリゲネスは、人間と他の生き物の根本的な違いは、人間が自分の造り主である神を知ることができることにあると考えます。すなわち人間は真理を受け入れることができます。この知識から、私たちの神との関係と友愛が生れます。現代にあって、ほかの知識とともに、神を忘れないでいることが大切です。私たちは、これまでに実にたくさんの知識を獲得してきました。けれども、もしも根本的な知識が欠けているならば、すなわち、それこそがすべてのものに意味と方向づけを与えてくれる根本的な知識が欠けているならば、つまり、私たちが造り主である神を知らないならば、このような知識は問題を生むこととなります。さらにいえば、それは危険なものとなります。

オリゲネスに戻りましょう。オリゲネスはこう述べています。「主よ、あなたが人間をご自身で肩に担いでくださらなければ、あなたはこの人間のみじめさを教うことができません。『主よ、天を傾けて降ってください』。あなたが肩に担いでくださらなければ、倒れた羊は自分で立ち上がることはできません。…この言葉は、御子に向けて述べられたものです。『主よ、天を傾けて降ってください』。…あなたは降って来てくださいました。あなたは天を傾け、天の高みから御手を差し伸べてくださいました、そして、人間の肉をその肩に担いでくださいました。こうして多くの人があなただを信じました」(オリゲネス「詩編講話」; 74 omelie sul libro dei Salmi, Milano, 1993, pp. 512-515)。

私たちキリスト信者にとって、神は、キリスト教以前の哲学と違って、もはや理論ではなく、現実です。神は「天を傾けて降ってください」ったからです。天そのものである神が、私たちの中に降って来られました。オリゲネスが、羊飼いが羊を肩に担ぐという、見失った羊のたとえを、神の受肉を表すたとえと考えたのは、もっともなことです。もしも受肉によって、神が降って来て、私たちの肉を肩に担いでくださったのなら、神は私たち自身を肩に担いでくださったのです。このようにして、神についての知識は現実となります。それは神との友愛となり、神との交わりとなるのです。私たちは神に感謝します。神は「天を傾けて降」り、私たちの肉を肩に担ぎ、私たちが生涯歩む道で、私たちを導いてくださるからです。

私たちが弱く、神の栄光から遠いものであることを見いだすことから始まった詩編は、神のわざへの大きな驚きをもって結ばれます。神は「インマヌエル」、すなわち、私たちとともにおられます。この神は、キリスト教にとって、イエズス・キリストのいつくしみ深い顔をもつ神です。イエズス・キリストは、人となられた神、私たちの一人となられた神だからです。

詩編 144 後

1, 今日、キリスト教一致祈祷週間が終わります。キリスト教一致祈祷週間の間、私たちは、キリストの弟子の完全な一致という大きなたまものを与えてくださるよう、常に主に祈り求めなければならないことを考察しました。実際、教会や教会共同体が共同で行うエキュメニズムへの取り組みをより真剣かつ実り豊かなものにするために、祈りは決定的な役割を果たします。

今日の集いの中で、私たちは再び詩編 114 についての考察を行います、詩編 144 は、夕の祈りで二つに分けて唱えられるからです(1-8 節および 9-15 節参照)。詩編の雰囲気は相変わらず賛歌ですが、この後半では、「王(油注がれた者)」が登場します。「王(油注がれた者)」とは、優れた意味で「聖別された方」すなわちイエズスです。イエズスはすべての人をご自分のもとに呼び寄せます。それは、彼らが一つとなるためです(ヨハネ 17:11, 21 参照)。賛歌のほとんどが、繁栄と平和を描く場面で占められているのは、偶然ではありません。繁栄と平和は、メシアが訪れる時代を典型的に示す、象徴だからです、

2, そのため、この詩編は「新しい」歌と呼ばれます。聖書の中で「新しい」という言葉は、言葉の外的な意味での新しさを指すだけではありません。この言葉は、それ以上に、最終的な完成によって希望が実現されることを表しています(9 節参照)。それゆえ、詩編は歴史の目標を歌います。そのとき、悪はついに声を発することができなくなります。詩編作者は、この悪について、「いつわり」、「いつわりの誓い」と述べます。これらは偶像崇拜を意味する言葉です(11 節参照)。

しかし、こうした消極的な意味での出来事に続いて、もっと多くの分量をさいて、積極的な意味での出来事が述べられます。すなわち、新たな、喜びに満ちた世が到来しつつあることが述べられます。これこそ真の意味での「シャローム」、すなわち、メシアがもたらす「平和」です。新しい世の輝きは、社会生活のさまざまな姿で描かれます。ここで述べられているのは、私たちがその実現を希望する、より公正な社会の姿でもあります。

3, まず、家庭のことが述べられます(12 節参照)。家庭の基盤は、子どもを生む力にあります。未来の希望である息子は、力強い若木にたとえられます。娘は固い宮柱だと言われます。この柱は、神殿の柱のように家を支えます。家庭の次に述べられるのは、経済生活です。農場では、穀物が倉を満たし、牧場では牛が草をはみ、家畜が肥えた畑を耕しています(13-14a 節参照)。

次に、町に目が向けられます。共同体の住民全体は、ついに、平和と安定という貴重なたまものを与えられます。実際、侵入者が攻撃した際に、町の城壁に開いた「破れ」は、ついになくなります。略奪や捕囚をもたらした、敵の襲撃は終わります。貧しい人、傷ついた人、被災者、孤児の上げる「叫び声」も聞かれません。これらは戦争のもたらす悲しむべき結果だからです(14b 節)。

4, さまざまなかたちで描かれた、このような未来の世界の実現は、メシアと、その民に委ねられます。私たちは皆、メシア、すなわちキリストの導きに従いながら、この安寧と平和を実現するために、ともに働かなければなりません。そのために、私たちは、

憎しみと暴力と戦争による、破壊的な行動をなくさなければなりません。しかし、私たちは、愛と正義である神の側に立たなければなりません。

だから、詩編は次の言葉で結ばれます。「このような祝福を受ける民、主を神としていただく国はしあわせ」。神はすべての善の中の善なる方、他のすべての善を可能にする方です。神を認め、霊的かつ道徳的な価値観を守る民だけが、真の意味で、深い平和を見だし、世と他の民に平和をたらす力となることができます。そこで、このような民は、詩編作者とともに、信頼と希望に満たされながら、「新しい歌」を歌うことができます。この「新しい歌」という言葉によって、私たちは、新しい契約、すなわち、キリストとキリストの福音がもたらした新しい出来事そのものを、自然に思い起こします。

聖アウグスチヌスが私たちに述べるのは、このことにほかなりません。アウグスチヌスは、この詩編を読む際に、「たて琴(十弦の琴)をとってあなたをほめ歌う」という言葉の意味も明らかにしています。アウグスチヌスは、この十弦の琴は、十戒にまとめられた律法のことだと考えます。けれども、私たちは、この十弦すなわち十戒をかなでるためにふさわしい鍵を見いださなければなりません。聖アウグスチヌスは言います。この十弦すなわち十戒が、愛の心をもってかなでられたとき、それは初めてすばらしい音を出すことができます。愛は律法を完成します。唯一の愛が開く空間として掟を実行する人が、真の意味で「新しい歌」を歌います。私たちがキリストの思いに結びつける愛は、「新しい人」が歌う、真の意味での「新しい歌」です、この「新しい人」が、「新しい世」を造り出すこともできます。詩編は私たちに、「たて琴(十弦の琴)」をもって、すなわち新しい心をもって歌うように招きます。それは、キリストの思いをもって歌い、愛の空間の中で十戒を行い、こうして、世の平和と安寧の実現に役立つものとなるためです(『詩編注解』143・16 : Nouva Biblioteca Agostiniana, XXVIII, Rome, 1977, p. 677 参照)。

第4週 金曜日 晩課 第1唱和

詩編 145 前

1, 私たちは詩編 145 の祈りを唱えました。詩編 145 は、主への喜びに満ちた賛美の祈りです。主は、そのすべての被造物を心にかける、愛深く優しい王としてたたえられます。教会の祈りはこの賛歌を二つの部分に分けて唱えます。この二つの部分は、それぞれ同じ詩編の二つの詩的また霊的な部分に対応します。では、その前半を見てみることにしましょう。それは1-13 節に相当します。

詩編は主をあがめます。この主は、「王」として呼び求められ、また述べられます(詩編 145:1 参照)。「王」は、神を表す言葉として、他の詩編の賛歌の中でも中心を占めます(詩編 47, 93, 96-99 参照)。さらに、この賛歌の霊的な中核をなしているのは、神の王権に対する深く激しい賛美です。詩編の中では、4回—あたかも存在と歴史の4つの枢軸を示すかのように—ヘブライ語の「マルクート」すなわち「主権」という言葉が繰り返されます(詩編 145:11-13 節参照)。

ご存知のように、こうした王の支配という象徴的表現は、神の救いの計画を表します。キリストの説教の中心となっていたのも、王の支配という象徴的表現でした。神は人間の歴史に無関心な方ではありません。それどころか、神は私たちとともに、又私たちのために、和解と平和の計画を実現することを望まれます。全人類も、神の救いのみ旨に従って、この計画を実現するように招かれています。この救いのみ旨は、すべての「人々」、「世々」、「今の世」、「次の世」すべての時代に及びます。神のわざは世界に及びます。神は世から悪を取り除き、主の「栄光」を王座に着かせます。主の「栄光」とは、主が自ら、力をもって、すべてを超えたしかたで現れることです。

2, この詩編の真ん中で一まさにそれはこの詩編の真ん中で行われます—詩編作者は賛美の祈りをささげます。詩編作者はすべての信じる者を代表して語ります。彼は今日でも、私たちすべてを代表して語ろうとします。実際、聖書の最高の祈りは、救いのわざへの賛美です。この救いのわざは、被造物に対する主の愛を現すからです。詩編は神の「名」を続けてたたえます。「名」とは神の存在のことで(1-2節参照)。神の「名」は、神が歴史の中で行うわざの中で示されます。だからこそ、神の「わざ」、「偉大な力」、「不思議なわざ」、「力」、「偉大さ」、また、神が「正義」で、「怒るにおそく」、「いつくしみ深い」、「恵みとあわれみに満ち」ていることが語られます。

これはいわば連願の祈りです。この祈りは、全被造物を完全な救いへと導くために、神が転変する人間の世界に入ってこられたことを告げます。私たちは闇の力に任されているのでも、自らの自由のうちに孤独でいるのでもありません。私たちは、力と愛に満ちた主のわざに委ねられています。主は私たちのために計画、すなわち「国(主権)」を打ち立てられるからです(11節参照)。

3, この「国(主権)」は、権力や支配、勝利や抑圧を意味するものではありません、残念ながら、地上の支配では、そのようなことがしばしば起こります。けれどもここでの「国(主権)」は、憐れみ、優しさ、いつくしみ、恵み、公正が示される場です。主への賛美を述べた箇所の中で、何度も繰り返して言われた通りです。

8節では、このような神の姿がまとめて述べられます。主は「怒るにおそく、いつくしみ深い」。この言葉は、神がシナイ山でご自分を示した言葉を思い起こさせます。主はこう言われました。「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、いつくしみとまことに満ちる」(出エジプト 31・6)。これは、使徒聖ヨハネが行った神への信仰告白を準備するものです。ヨハネは単純に、「神は愛である」(Deus caritas est) と言いました(Iヨハネ 4:8, 16 参照)。

4, このすばらしい言葉は、神が「怒るにおそく、いつくしみ深い」、常に進んでゆるし、助けてくださる方であることを、私たちに示しています。この言葉についての考察に加えて、私たちは9節の美しい言葉にも目を向けたいと思います。「その恵みはすべてに及び、いつくしみは造られたすべてのものの上にある」。これは、私たちがよく考えるべき言葉です。それは、慰めに満ちた、私たちの人生にかならず役立つ言葉です。この言葉に関連して、聖ペトロ・クリソロゴ(380年頃—450年頃)は、『断食についての第二の講話』の中でこう述べています。

『神のわざは偉大』。しかし、私たちが被造物の偉大さのうちに認めるこの偉大さ、このみ力より大きいのは、憐れみの大きさです。実際、預言者はこう言っています。『神のみわざは偉大である』。けれども別の箇所で、預言者はこう付け加えます。『神の憐れ

みは、そのすべてのみわざよりも偉大である』。兄弟の皆さん。憐れみは天と地に満ちています。……だから、キリストの大きく、寛大で、比類のない憐れみは、すべての人の世にゆるしのための休戦を定めました。キリストは、あらゆる裁きを一日だけ猶予してくださるからです。……だから、預言者は、義そのものを信じるのでなく、憐れみにまったき信頼を置いたのです。『神よ、いつくしみ深くわたしを顧み、豊かなあわれみによって わたしのとがをゆるしてください』(詩編 51・3) (『断食についての第二の講話』42・4-5: Sermoni 1-62bis, Scrittori dell' Area Santambrosiana, I, Milano-Roma, 1996, pp. 299, 301)。わたしたちも主に言います。「わたしの神よ、わたしを憐れんでください。あなたの憐れみは大いなるものだからです」。

第4週 金曜日 晩課 第2唱和

詩編 145 後

1, 教会の祈りが2つに分けて唱えるのに従って、私たちは改めて詩編 145 の考察を行います。詩編 145 は、主をたたえる驚くべき賛歌です。主は愛深い王として、その造られたものに心をとめます。今、私たちは後半の 14-21 節について考えてみたいと思います。ここでも、詩編の前半の根本的なテーマがあらためて取り上げられます。

詩編の前半は、神のあわれみと優しい心、忠実さといつくしみが、全人類とすべての被造物に及ぼされることをたたえます。この後半で、詩編作者は、主の愛が特別なしかたで貧しい人、弱い人に与えられることに注意を向けます。それゆえ、神の主権は、時として人間が権力を振るう際に見られるような、無関心なもの、傲慢なものではありません。神は最も弱く、身を守るすべをもたない被造物に身をかがめて、その主権を表すのです。

2, 実際、神は何よりも父です。この父は「倒れる者をすべて立たせ」、はずかしめられて塵の中に沈んだ人を立たせます (14 節参照)。それゆえ、いのちあるものは主に向かいます。言ってみれば、いのちあるものが腹をすかせた物乞いのように頼むと、神はよく気がつく父親のように、彼らが生きるために必要な食べ物を与えてくださるのです (15 節参照)。

そこで詩編作者の舌は、神の優れた二つのあり方について、信仰を告白します。すなわち、正義と聖性です。「神の行なわれたことはすべて正しく、そのわざはいつくしみに満ちている」(17 節)。ヘブライ語で、神とその民の間に結ばれた契約を典型的に表すために、「サディーク (正しい)」と「ハシード (いつくしみ深い)」という 2 つの形容詞が用いられます。この二つの言葉は、それぞれ、悪から救い出そうと望む正義と、主の大きな愛のしるしである忠実さを表します。

3, 編作作者は、恵みを与えられた者のそばに立って語ります。この恵みを与えられた者について、詩編作者はさまざまなかたで述べます。すなわち、その行いにおいて、真の意味で信じる者の姿が示されます。信じる者は、ゆるぎない祈りのうちに主を「求め」、生涯を通して「心から」いのちの主を求めます (18 節参照)。信じる者は神を恐れ、そのみ旨を敬い、その言葉に聞き従います (19 節参照)。けれども、何より信じる者は

主を「愛」し、自分が主の保護と親しさの覆いで守られることを堅く信じています (20 節参照)。

そこで、詩編作者が最後に述べる言葉は、彼が賛歌の最初に述べた言葉と同じものとなります。すなわち彼は、主と「その名」をたたえ、賛美せよと招きます。「名」とは、世界と歴史の中で働き、救いをもたらす、生ける聖なる方のことです。さらに詩編作者は、いのちのたまものを与えられたすべての被造物に、賛美の祈りをささげるよう招きます。「すべての民は世々限りなく、とうといその名をほめたたえる」(21 節)。この賛美は、いわば地上から天に向かって終わりなくささげられる賛歌です。すべてのものとともに、あまねく世界に及ぶ神の愛を賛美します。神は平和と喜びと救いの源だからです。

4, この考察の終わりに、あの甘美な言葉についてもう一度考えてみたいと思います。すなわち、「助けを求めるすべての人、心から祈る人のそばに神はおられる」(18 節)。これは、ガザのバルサヌフィオスが特に好んだ言葉でした。バルサヌフィオスは 6 世紀半ばに没した隠遁者です。彼はその識別の知恵のゆえに、修道者や聖職者や信徒からの相談を受けました。

たとえば、「自分を襲うさまざまな誘惑の原因」を見いだしたいと述べた弟子に対して、バルサヌフィオスはこう答えました。「兄弟ヨアンネスよ、あなたを試そうとしてあなたに生じる誘惑を恐れてはいけません。主はあなたを誘惑のなすがままにされないからです。誘惑に遭うときは、その誘惑がどのようなものであるのか理解しようと努めず、イエズスの名を呼び求めなさい。『イエズスよ、私を助けてください』と。そうすればイエズスはあなたの声を聞いてくださいます。なぜなら、『助けを求めるすべての人…のそばに神はおられる』からです。元気を出して、熱心に走りなさい。そうすれば、あなたは自分のめざしている、私たちの主キリスト・イエズスに到達することができるでしょう」(ガザのバルサヌフィオスとヨアンネス『書簡集』39 : Conana di Testi Patristici, XCIII, Roma, 1991, p.109)。

この古代の教父の言葉は、私たちにもあてはまります。困難や問題や誘惑に遭うとき、私たちはただ、それがどこから来たのかと、理論的に考えるだけはいけません。むしろ、積極的なしかたで対応すべきです。主に祈り求め、主との生きた関係を保とうとしなければなりません。それ以上に、私たちはイエズスの名を呼び求めなければなりません。「イエズスよ、私を助けてください」と。そうすれば、イエズスはかならず私たちの言葉に耳を傾けてくださいます。イエズスはイエズスを求める人の近くにいますからです。元気を出そうではありませんか。教父が言っているように、熱心に走ろうではありませんか。そうすれば、私たちも、いのちである主イエズスに達することができるでしょう。

マリアの賛歌

1, 私たちは、私の敬愛すべき前任者である、忘れることのできない教皇ヨハネ・パウロ II 世がちょうど 5 年前に開始した、長い旅路を終えることになりました。偉大な

教皇ヨハネ・パウロ II 世は、そのカテケジスの中で、教会の祈りの朝の祈りと晩の祈りの基本的な部分である、一連の詩編と賛歌全体を扱おうと望みました。テキストをめぐる旅路は、賛美と祈願と祈りと観想の花々の咲き乱れる花園をめぐる旅でした。この旅路を終えるにあたって、私たちは少しの同、晩の祈り全体をしめくくるにふさわしい賛歌である、「マリアの賛歌 (マグニフィカト) (ルカ 1:46-55) について考えてみたいと思います。

「マリアの賛歌」は、聖書における「貧しい者 (アナウィーム)」の霊性を表現しています。「アナウィーム」とは、自分の「貧しさ」を認める、信仰深い者のことです。この人びとが「貧しい」のは、富や権力の偶像に捕われないためばかりではありません。彼らは、深い心のへりくだりのゆえに、すなわち、傲慢への誘惑をもたず、救いをもたらす神の恵みに心を開いているために、「貧しい」のです。今、システィーナ礼拝堂聖歌隊が歌ってくださった「マリアの賛歌」の全体を特徴づけるのは、このへりくだり(ギリシア語でタペイノーシス)です。「へりくだり」は、現実に身分が低く、貧しい状況を意味します。

2, 「マリアの賛歌」の前半 (ルカ 1:46-50 参照) は、天におられる主へとささげられる、独唱者の歌声のようです。実際、そこでは常に繰り返して、一人称が用いられていることを指摘することができます。「わたしは…、わたしの心は…、わたしをしあわせな者と呼ぶ、……わたしに偉大なわざを行なわれた」。それゆえ、この祈りの中心は、神の恵みへの賛美です。神の恵みはマリアの心と生活に入り、マリアを-主の母としたからです。私たちは、まさにおとめの声が、このように救い主について語るのを耳にしています。救い主はマリアの魂とからだに偉大なことを行われました。

マリアの賛歌の祈りを深い意味で形づくっているのは、賛美と感謝と喜びです。けれどもマリアは、この自らのあかしを、ひとりで密かに、ただ個人的に行うものではありません。なぜなら、おとめマリアは、自分が人類のために実現しなければならない使命を帯びており、自分の人生は救いの歴史と結ばれているのだということを自覚していたからです。だからマリアはこう言うことができるのです。「あわれみは代々、神をおそれ敬う人の上に」(50 節)。この主への賛美によって、おとめマリアは、マリアの『お言葉通り、この身に成りますように (フィアット)』によってあがなわれたすべての被造物が声を上げることを可能にしました。あがなわれた被造物は、マリアから生まれたイエズスの姿のうちに神のあわれみを見いだすからです。

3, そこから「マリアの賛歌」の詩的で霊的な後半(51-55 節参照) が展開します。後半は合唱の調子で述べられます。あたかも、神の驚くべき選びのわざをたたえるために、信じる者の共同体の声がマリアの歌声に加わったかのようです。ルカによる福音書のギリシア語原文では、七つの動詞が不定過去時制で用いられています。これらの動詞は、主が歴史の中で絶えず行ってきたその他の多くのわざを表します。「その力を現し、思い上がる者を打ち砕き、権力をふるう者をその座からおろし、見捨てられた者を高められる。飢えに苦しむ者はよいもので満たされ、おごり暮らす者はむなしくなって帰る。…しもベイスラエルを助けられる」。

これらの七つの神のわざのうちに、歴史の主である方が何かをする時の「やり方」がはっきりと示されています。すなわち、主はもっとも小さな者の側に立たれるのです。主の計画は、人類のさまざまな出来事から或る不透明な状況の中で、しばしば隠れてい

ます。そこでは「権力をふるう者」、「思い上がる者」、「おごり暮らす者」が勝利を収めるからです。しかし、主の隠れた力は、ついには、どのような者を神が真に喜ばれるかをかならず明らかにします。すなわちそれは、「神をおそれ敬う者」、つまり神の言葉に従う者、「卑しいはしため」、「しもベイスラエル」です。「しもベイスラエル」とは、マリアのように、心が清く単純な「貧しい者」から成る、神の民の共同体のことです。イエズスはこの「小さな群れ」を、「恐れるな」と言って招きました。それは、御父が、この小さな群れに紙の国を与えることを望んでいるからです（ルカ 12:32 参照）。こうして、「マリアの賛歌」は、私たちもこの小さな群れに加わるように招きます。それは、真の意味で、心が清く単純で、神を愛する、神の民の一員となるためです。

4, ですから、聖アンブロジオが『ルカ福音書註解』の中で私たちに向けて行う招きを、受け入れようではありませんか。この偉大な教会博士はこう述べています。「一人ひとりの人の中でマリアの魂が主をたたえてくださいますように。一人ひとりの人の中でマリアの霊が主を喜びたたえてくださいますように。肉に従えば、イエズスの母がただ一人であるなら、信仰に従えば、すべての魂はキリストを生み出します。実際、すべての人は自分の中で神のみ言葉を受け入れるのです。…マリアの魂は主をあがめ、マリアの霊は神を喜びたたえます。なぜならマリアは、その魂と霊を御父と御子にささげながら、万物を生み出す方である唯一の神と、万物がそのおかげで存在する方である唯一の主を、心から愛情をこめて礼拝するからです」（『ルカ福音書註解』2・26-27:Sancti Ambrosii episcopi Mdiolanensis opera, XI, Milano-Roma, 1978. p.169）。

「マリアの賛歌」についてのこの聖アンブロジオのすばらしい注解の中で、特にいつも私の心を動かすのは、この驚くべき言葉です。「肉に従えば、イエズスの母がただ一人であるなら、信仰に従えば、すべての魂はキリストを生み出します。実際、すべての人は自分の中で神のみ言葉を受け入れるのです」。このようにして、この聖なる教会博士は、おとめマリア自身が語った言葉を解釈しながら、私たちに、私たちの魂と私たちの生活を主の住まいとしてささげるように招いています。私たちは心の中に主を抱いているだけではいけません。私たちは、主を世界にもたらさなければなりません。それは、私たちもまたキリストを現代に生み出すためです。主に祈り求めましょう。主の助けによって、私たちがマリアの霊と魂とともに主をあがめ、あらためてキリストを現代世界にもたらすことができますように。